

学校園教育推進サポート事業 報告書

| | | | | | | | |
|----------------|------|-------|-------|-----|-------|------|---------------|
| 学 番 | 1715 | 学校名 | 大野小学校 | 校長名 | 片山 敏郎 | 作成者名 | 山下 信孝 |
| 学校教育推進サポート担当者名 | | 山下 信孝 | | | | 電 話 | 025-3777-2046 |

1 実践のテーマ

情報活用能力と自己調整能力を備えた「自立した学習者」の育成
 —「個別最適な学びと協働的な学びの一体的な充実」大野モデルの提案—

2 テーマ設定の理由

令和5年度全国学力・学習状況調査の児童生徒質問紙調査によると、新潟市は、GIGAスクール環境を生かした授業でICTを活用している割合が20政令指定都市の中で第1位である。これは、本市教育委員会と学校現場が一体となって授業改革に努めてきた成果である。

現在、国の方向として、GIGAスクール環境を最大限に活かしながら、令和の日本型学校教育（答申）に示された、「自立した学習者」の育成に向け、「子供一人一人を主語」とした「個別最適な学びと協働的な学びの一体的な充実」を目指した授業改革に取り組むことが求められている。本市においても「新潟市立学校園教育の推進」目標1「確かな学力の育成」の下位項目として1-1（個別最適な学びと協働的な学びの一体的な充実による授業の質の向上）、1-2（学習の基盤となる情報活用能力の育成）が方策に掲げられている。しかし全体的な傾向として、子供たちが教師の指示の範囲の中でのみ端末を活用するといった「デジタル一斉学習」と呼ばれる授業形態が未だ一般的であることが課題となっている。

当校では、令和5年度からすでにこの課題に取り組み、全学級でのOJTや信州大学の佐藤准教授や附属新潟小学校の中野教諭の指導を仰ぎながら、「情報活用能力の育成」及び「個別最適な学びと協働的な学びの一体的な充実」の要件を明らかにしようと試みてきた。

その結果、令和5年度新潟市生活・学習意識調査（11月実施）では、52「授業でiPadなどのICTをどのくらい使用しましたか」の問いに、「ほぼ毎日」と回答した児童が全校の82.7%（市平均61.7%）となるなど、端末活用を前提とした授業づくりの定着がみられた。また、OJTでの授業研究の中で、学習者主体の授業において、子供が選択・判断・自己決定をする「自己調整能力」を育成する要素として、「学習課題」「アプリケーションや機能」「思考ツール」「学習進度」「教材」「協働する相手」「学習内容」等があることが明確となった。しかし、子供に委ねる各要素の割合や身に付ける順序、教科・単元特性等は明確でなく、本市の情報活用能力育成指標を生かした評価の在り方など、明らかにすべきことは多い。

現在、本市の多くの学校が、「個別最適な学びと協働的な学びの一体的な充実」を目指した授業づくりの重要性を認識しながら踏み出せていないと認識している。その一番の理由は、授業イメージが掴みづらいためであると思われる。その要因は、全国で様々な先行事例が公開されているものの、GIGAスクール環境が自治体によって異なり、OSやアプリケーションによって、具体的な授業像が変わるため、他自治体の授業例を参考に実践することが難しいからである。

そこで、新潟市のGIGAスクール環境の特徴を生かした「個別最適な学びと協働的な学びの一体的な充実」を目指した授業イメージを提案することで、本市の教職員が、具体的なイメージをもつ事例創出を行いたい。また、明らかにした要素や仕組みを他自治体も含めて広く公開・共有し貢献したいという願いから本テーマを設定した。

3 実践内容

- (1) 研究授業や視察公開授業を核としたOJTと日常の授業の充実と提案の創出
 ・教科チームでの検討と全員授業公開・協議を通じた事例の創出

- ・「個別最適な学びと協働的な学びの一体的な充実」を支える要素、目指す資質・能力の育成方法の検討・提案
 - ・ビジネスチャットやロイロノート等を用いた検討会・日常の情報共有
- (2) 職員研修の充実
- ・「個別最適な学びと協働的な学びの一体的な充実」の理論研修の実施
 - ・ICT活用指導力を高めるスキルアップ研修の実施
- (3) 研究会の実施による市内への横展開
- ・クラウドを用いた指導案等の共有
 - ・対面型授業公開及び中教審委員東京学芸大学教授 堀田龍也様による講演会の実施
 - ・「個別最適な学びと協働的な学びの一体的な充実」大野モデルの提案
 - ・オンライン配信で、市内学校に広く情報を共有

4 実践計画

| 実施時期 | 実施内容 (研修会、先進校視察、授業公開 等) |
|------|--|
| 4月 | 研究計画の提示、オンライン研修会①講師 信州大学准教授 佐藤和紀様 |
| 5月 | 提案授業の実施、オンライン研修会②春日井市立小学校研究主任 |
| 6月 | オンライン研修会③講師 桃山学院教育大学 木村明憲様 |
| 7月 | オンライン研修会④講師 信州大学准教授 佐藤和紀様 |
| 11月 | 授業研究会 (授業公開・授業モデル提案・講師 東京学芸大学教授 堀田龍也様による講演会、対面及びオンライン) |
| 2月 | 研究成果のまとめ・報告書提出・録画動画の公開 |
| 通年 | 研究成果のまとめ・報告書提出・録画動画の公開 各種視察の積極的受け入れ (通年) |

5 成果

大野小学校では、今年度、情報活用能力と自己調整能力を備えた「自立した学習者」の育成を実践のテーマに掲げ、授業DXと家庭学習DXの2つの柱で取り組んだ。2つの柱とも、クラウドの活用と学びの自己調整を柱に、個別最適な学びと協働的な学びの一体的な充実を図ることで、自立した学習者の育成を目指した。

【授業DXの取組】

クラウドの活用と学びの自己調整を柱に、「クラウド活用型授業モデル」を作成した。クラウドに以下の6つの協働的な学びを促す共有物を提示した。

① 学習の手引き

右図のように「課題・手順・評価基準」などを準備し、子供たちが主体的に学習を進められるようにした。具体的には、毎時間子供が学習計画を立てたり、振り返りを行ったりしながら、学習を積み上げていくようにした。学習の手引きに、単元の目標、評価基準、学習計画、進め方を共有することで、子供はこれを基に単元全体を見通し、学習計画を立てることができた。

また、課題解決に使用するアプリケーションの選択や誰とどのように学ぶか、調べたりまとめたりする時間配分などについても、自分で選択・判断するよう取り組んできた。

② 学習に用いる各種資料

子供が自ら学習課題を解決するために必要となる資料・教材・リンク先などを準備し、クラウド上で共有をし

The screenshot shows a table with columns for '学習計画' (Learning Plan) and '振り返り' (Review). The table contains multiple rows of text and icons, representing a structured learning schedule.

デジタル検定と私たち 単元名 6年1組8番 名前

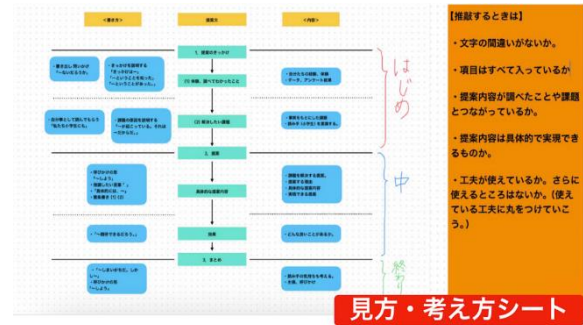
| | |
|--|---|
| 単元の目標 デジタル機器の使いかたについて、誰もが助け合いをもって取り組むように、情報を工夫して、授業する文章を書こう。 | 評価ポイント 評価基準 ・単次や復習と結びつく授業内容が、 ・授業内容は具体的な、 ・授業内容は実現できるものか、 ・書き方や内容の工夫を凝らしているか。 |
| 学習計画 ・学習計画 | 進め方 ・進め方 |

①テーマを決める。 https://drive.google.com/file/d/1_2MxcmQa3N1e5G2t4u6k3BepE0_MuPz0/view?usp=sharing
 ②情報を集めて、授業内容を考える。 <https://drive.google.com/file/d/1Acu185c08b6411W8j751cVno8N352/view?usp=sharing>
 ③文章の構成を考える。 <https://drive.google.com/file/d/1J58314b7u4w4E280b202u464179d1T4/view?usp=sharing>
 ④授業する文章を書く。 <https://drive.google.com/file/d/1x1a819B8e82B8e85Pme231T4KouMf4/view?usp=sharing>
 ⑤グループ内で読み合い、投稿する。 https://drive.google.com/file/d/1w_48b1D8d8wQ_QoM81945508W081w/view?usp=sharing
 ⑥他のグループと読み合う。評価する。

た。そうすることで、子供が自分に合った資料や教材を自己選択しながら課題に取り組めるようにした。

③ 教科の見方・考え方シート

子供たちが課題に対して自分の考えをもったり友達の考えと自分の考えを比較したりする際に「教科の見方・考え方」が必要となる。そこで、それぞれの教科に合わせた「教科の見方・考え方」の発揮を促す手掛かりとなるようにポイント等をまとめたものをクラウド上に共有した。国語科を例に挙げる。右図のように、国語の見方・考え方を発揮する手掛かりとなる、書き方、提案文の流れや内容、推敲するときのポイントなどがまとめられている資料をクラウド上に共有する。子供は、この資料を活用しながら、自分のペースで学びを進めていく。さらに、クラウド上の友達の考えや成果物を自分が必要なタイミングで他者参照しながら学習を深めていく。また、タブレットで他者参照するだけでなく、自由に席を立ち、直接友達と「自由交流対話」をすることで、学びを深めることにも重点をおいて取組を行った。



クラウドを用いた協働的な学び
他者参照



直接的な協働的な学び
自由交流対話



④ 学習成果物

子供自身がkeynote や numbers、フリーボードなどの標準アプリを選択して、まとめた成果物やその過程をクラウド共有した。そうすることで、いつでも相互に参照できるようにし、考えを強化したり変えたりと学びを深めることができるようにした。

⑤ まとめ・振り返りの共有

毎時間終末に書く振り返りは、「学んだこと、できたこと」「次回に向けて」のように、視点を持たせて子供たちに記述をさせた。そうすることで、単元での学びを連続性をもって捉えることができ、モチベーションの維持向上や自己の成長への気付きにもつながっていくととらえた。さらに、クラウド上で共有することによって、自分の伸びを自覚したり学習した内容を振り返ったり友達の振り返りを参照したりできる。それらのことからさらに学びを深めることができるようにした。

また、生成AIを活用した授業づくりにも取り組んだ。推奨年齢の関係上、大野小学校では、子供が操作するのではなく、教師がプロンプトの入力などを行った。ガイドラインに則り、生成AIのみに頼るのではなく、生成AIから出された文章を比較対象にしたり、生成AIにアイデアを提案させ、それをもとに検討をしたりするなど、最後は人の思考が介入するような使い方をした。理科の実験を例に挙げる。理科の実験の計画を立てる際に、教科書に記載されている実験と、生成AIから提案された実験を比較した。この比較を通して、教科書に書いてある道具の意図を改めて確認したり、動画で撮影するという生成AIのアイデアを実際に取り入れたりするなど、より良い形の実験を検討することができ、子供の深い学びにもつなげることができた。

このように、クラウド活用型授業モデルを活用し全職員で共有し、学びを自己調整しながら進める授業を年間を通して行うことで、子供が自立した学習者として成長していけるよう取り組んだ。その結果、新潟市学習・生活意識調査の大野小独自項目「タブレットで友達と考えを交流することで、新しい考えに気付いたりよりよい考え方が分かたりしました。」では肯定的評価が93.2%、「iPadを使った学習は、学びを深めることに役立っています。」では肯定的評価が93.6%とタブレット端末を活用し、クラウドで共有することで、多くの子供たちが新しい考えに気付いたり、学びを深めたりすることができたことが分かる。また、子供が自分に合った学習方法を選択したり、学んだことをアプリやツールを使ってよりよく表現できたり、協働して学びやすくなったと実感する教師も増え、子供にと

っても教師にとっても有用であったといえる。

【家庭学習 DX の取組】

今年度から大野小学校では、2～6年生までの子供たちは「TMT（楽しく学んで力がつく）学習」（5年生が全校に公募をして考えた名前）を行っている。

取組の内容は、以下の5点である。

- ・学校で、Google スプレッドシートにその日に取り組む内容とめあてを打ち込む。
- ・家庭に帰った後、どのような学習をしたのかが分かる画像を貼ったり、学習時間や振り返りを書いたりする。
- ・子供が打ち込んだ家庭学習の内容や家庭学習に取り組んだ画像をクラウドで共有し、友達の学習も見られるようにする。
- ・1週間の学習状況をグラフ化し、自分の学習状況を視覚で分かるようにする。
- ・6年生が3年生へ、5年生が2、3年生へというように家庭学習のやり方を先輩が後輩に教えるという、異学年交流も行っている。

である。これらの取組を通すことで、友達の自主学習の内容や振り返りを参照することができ、自己の家庭学習に活かしながら学習習慣を形成していくことができていた。子供自身も「スプレッドシートを書くことによって、みんなの学習を参考にして自分の学習に取り入れることができるようになった。」「TMT 学習を始める前は、ただ学習を考えるだけだったけど始めてからはどんな内容をすれば力がつくのか考えて取り組めるようになった」と TMT 学習の良さを実感し取り組んでいた。その結果、新潟市生活・学習意識調査では、「宿題をきちんとやっているか」の項目で、肯定的評価が95.8%（新潟市94.7%）「宿題以外にも自主的に家で勉強しています」の項目で、肯定的評価が81.3%（新潟市71.8%）と内容や時間などを自己調整しながら子供自身が主体的に家庭学習に取り組むことができたことが分かる。

【授業DXと家庭学習DXを行った成果】

授業DXと家庭学習DXの2つの取組を年間を通して行ったことで、学力が大きく向上した。1月実施のCRTでは、国語も算数も5つの学年で全国比が前年度より5%以上の向上が見られた。例えば、5年生は、全国比で国語が、昨年度から8%アップの108%に、算数が16%アップの115%と大きな成果が見られた。どちらの教科も、知識・思考力・態度の全ての領域で全国平均を上回る結果となった。これらのことから、この2つのDXの取組が学力向上に効果があると感じている。また、5月に京都橘大学から池田修教授を招き生成AIの研修をしたり、8月に桃山学院教育大学の木村明憲准教授を招き自己調整学習について研修をしたり、11月に開催した公開学習会において東京学芸大学大学院教授の堀田龍也教授を招き、「自立した学習者に育てあげる授業とは」の演題の下、講演をしていただいたりしたことで、教職員の授業DXと家庭学習DXに対する見方・考え方も日々深まりを見せ、自発的に研修をしたり意見を交換したりして高め合う姿も見られるようになった。それらのことから、職員の意識の向上も成果としてあげることができる。また、県内外から月1回程度の視察の受け入れ、授業DXの「クラウド活用型授業モデル」家庭学習DXのスプレッドシートの公開、近隣の学校の要請を受け当校職員による授業DXと家庭学習DXの伝達など校内にとどまることなく、外部にも大野小の取組を広げることができたことも成果としてあげられる。今年度、サポート事業の指定を受けたことで、子供も職員も多くの学びを得ることができた。次年度もこの学びを活かしながら取組を進めていきたい。

